

2019年度 全国コミュニティ・スクール研究大会

第4分科会 高校・特別支援学校におけるコミュニティ・スクールの可能性

特別支援学校と学校が立地する地域の効果的な 連携・協働体制による防災体制の構築



山口県立山口南総合支援学校

1 はじめに

コミュニティ・スクールって？

「特別支援学校にCSは必要なの？」

「特別支援学校における『地域』をどのように考えるのか？」

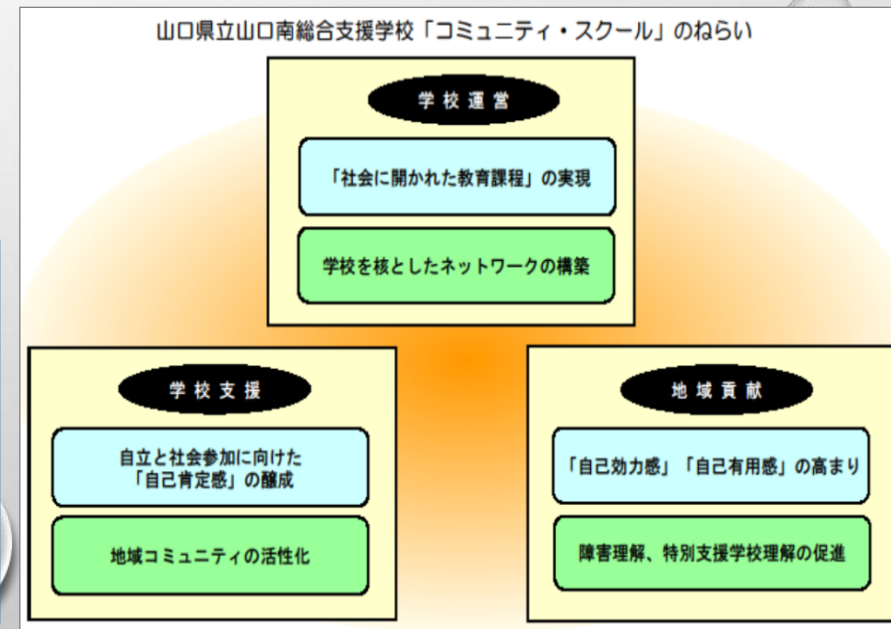
「地域連携をすることで、教職員の負担が
増えるのではないか」

など

なぜ特別支援学校でCSを
導入するのか、教職員間
での共通理解が必要

最終目標は...

- ①障害のある幼児児童
生徒の
「自立と社会参加」
- ②ともに認めあえる
「共生社会の実現」



本校の概要（歴史）

- 明治40年 盲啞学校として創立
- 昭和 4年 県立の盲啞学校へ
- 昭和23年 盲学校と分離し山口県立聾学校へ
- 昭和25年 下関市から山口市へ移転



山口県の特別支援教育の転換
・県内すべての盲・聾・養護学校を
原則5障害対応の特別支援学校に！

- 平成20年 山口県立山口南総合支援学校と改称
（旧聾学校としての役割を残しつつ）

本校の概要（今年度在籍状況）

幼児児童生徒数

部 学年 区分	幼稚部				小学部									中学部					高等部				合計	乳幼児教育相談	
	3歳	4歳	5歳	小計	1年	2年	3年	4年	5年	6年	重複	訪問	小計	1年	2年	3年	重複	訪問	小計	1年	2年	3年			小計
学級数	1	0	1	2	1	0	1	0	0	1	1	0	4	4	4	3	3	1	15	7	6	7	20	41	
男	1	0	1	2	2	0	0	0	0	1	1	0	3	6	3	3	5	0	17	20	17	18	55	77	3
女	0	0	1	1	0	0	1	0	0	1	1	0	4	1	2	3	2	1	9	8	4	5	17	31	0
計	1	0	2	3	2	0	1	0	0	2	2	0	7	7	5	6	7	1	26	28	21	23	72	108	3

2 本校コミュニティ・スクールの取組の概要

<導入当初の状況>

- ・ 以前から地域との交流活動はあるが、地域の方や関係機関の方が学校運営に参画する仕組みづくりまでには至っていない。
- ・ CSの取組の意義等について、すべての教職員が理解しているわけではない。
- ・ 旧聾学校(～H19)であることから、特に聴覚障害教育に関する専門性の一層の向上や地域等への発信に取り組んでいる。

<方針>

- ・ 学校の特色や課題に対応した学校運営協議会委員を選定する。
- ・ CSを知っている人、関心がある人を少しでも増やす。
- ・ 現在の教育活動を再検証し、持続可能な取組を増やす。
- ・ 温かいつながりを感じる経験を増やす。→「顔の見える関係づくり」
- ・ 決して無理をしない。

学校のことを
知ってほしい!

子どものことを
知ってほしい!

1年目の取組

学校運営に関する共通理解
あいサポート養成講座の開催



★ 第3回学校運営協議会 → 防災に関する内容が議題に

「防災に関する課題解決のために地域とのつながりを深めてはどうか。」

→ 地域の防災訓練に参加！！

2年目の取組

本校の課題等を踏まえて学校運営協議会委員を新たに任命
・地域の防災士 ・食生活改善推進員
・民生児童委員(読み聞かせ)

★ 第2回学校運営協議会 → 熟議「山口南の地域との連携の可能性」

地域連携教育エキスパートの先生を招聘して、学校、家庭、地域で熟議をする必要性を学ぶ



熟議におけるグループ協議の様子

地域と連携した防災に関する取組（平成30年度）

2019年度全国CS研究大会
第4分科会

1 山口県総合防災訓練への参加



3 大規模机上シミュレーション



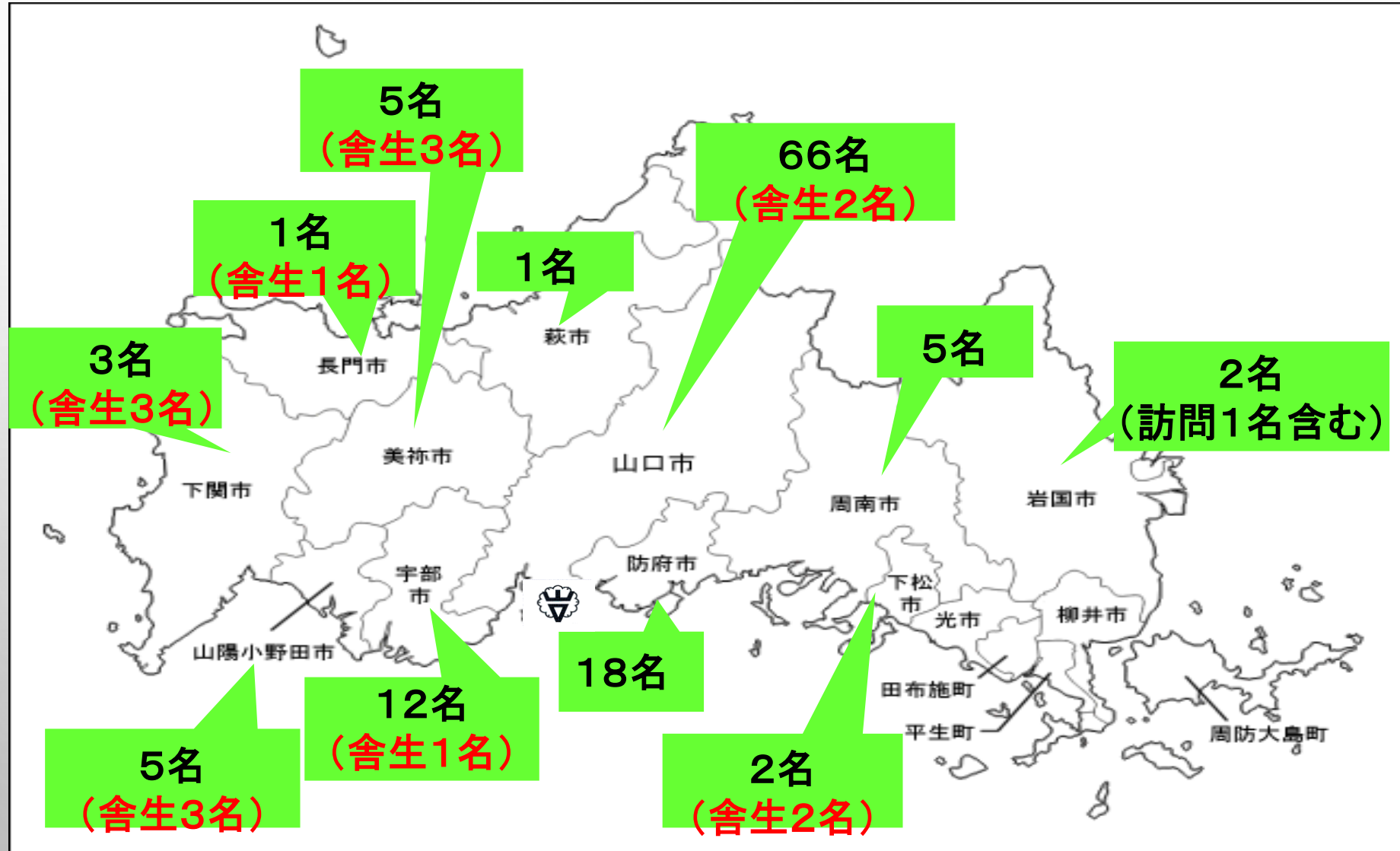
2 地震・津波・二次火災避難訓練

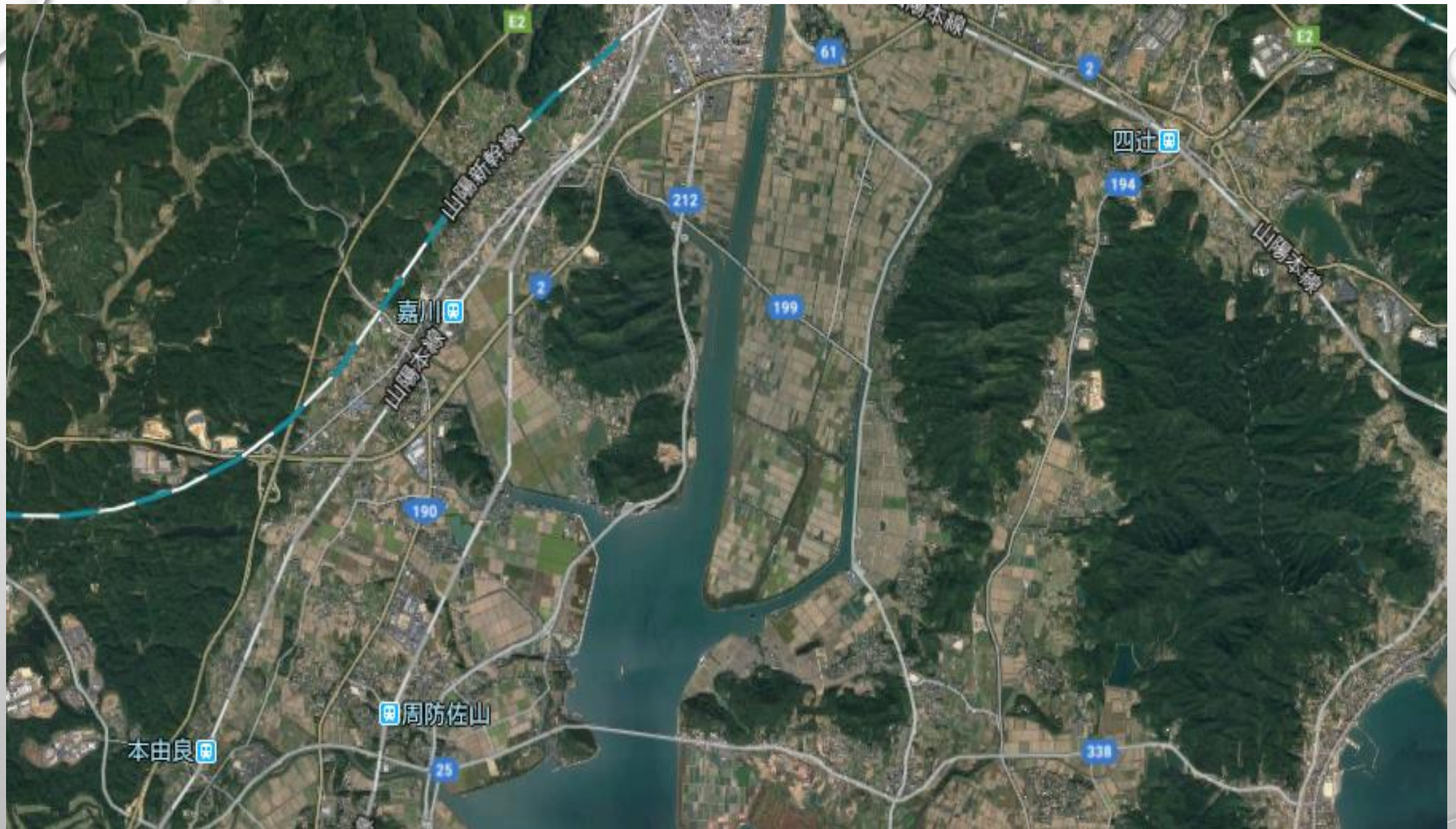
【一次訓練】
校内で実施

【二次訓練】
地域と合同で実施



本題に入る前に





1 山口県総合防災訓練への参加

【訓練の目的】

- ・対応手順の確認
- ・関係機関との連携強化
- ・防災意識の普及啓発

【参加の目的】

- ・地域との連携体制の確認
- ・地域の障害理解の促進

- ・受付記名体験

・段ボールベッド作り





【地域の障害理解促進】

- ・本校の子どもたちへの関心が高まった。
- ・障害のある人が、避難所に来られたときの支援について考えるきっかけになった。

< 例 防災訓練への参加 > 避難所名簿作成体験

聴覚障害者に対する
手話での対応や筆談
でのやり取りが今後
必要であることに気付
いてもらった。

災害時だからこそ、
より一層丁寧な情報保障が
必要になるんですね。



防災の取組が、
聴覚障害教育に関する理解促進の面でも
非常に役立った。

2 地震・津波・二次火災避難訓練



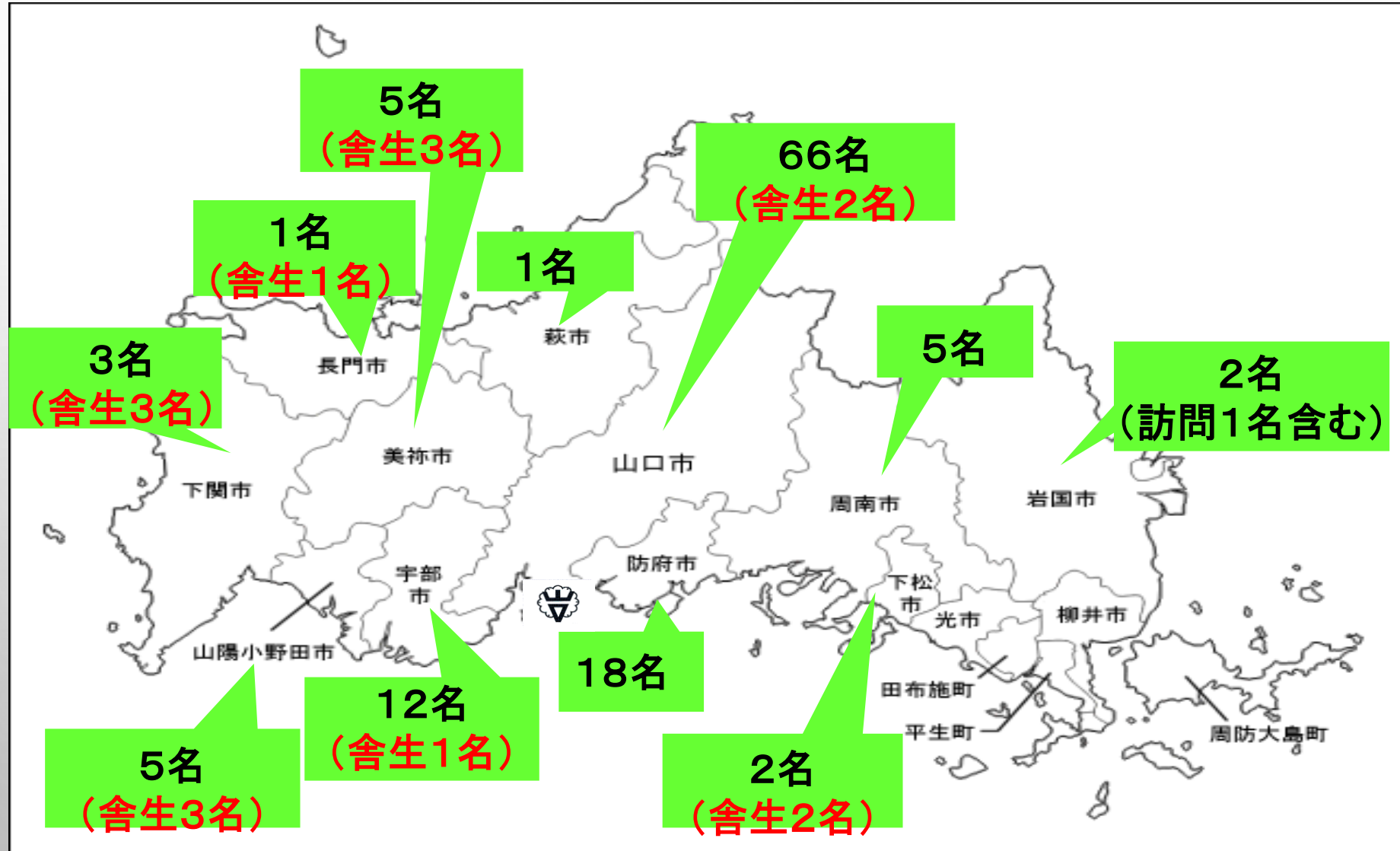
※ 一次訓練 → 校内で実施



※ 2次訓練
→ 地域と合同で実施



本題に入る前に



備蓄と非常食等キット

2019年度全国CS研究大会
第4分科会



非常食等キット
教職員は全員が購入
→ 意識向上の表れ

3 大規模机上シミュレーション

【実施の目的】

- ・災害時におけるそれぞれの役割を明確にする。
- ・大規模地震が発生した場合、支援の方法
学校の幼児児童生徒、教職員（計240人）がどのように動くのかを、
地域に知っていただく。



地域を交えた大規模机上シミュレーション



地域を交えた大規模 机上シミュレーション



< 大規模机上シミュレーション >

< シミュレーションを行っての気付き >

- 1 災害時の幼児児童生徒の引き渡しについて、完全に終了するのは、早くても地震発生から2日後である。
- 2 夏場は、水の確保や害虫対策が必須である。
- 3 けが人が出た場合の対応について共通理解が必要である。
- 4 地域の方々や近隣研修施設利用者が避難を求めてきた場合の対応が必要である。

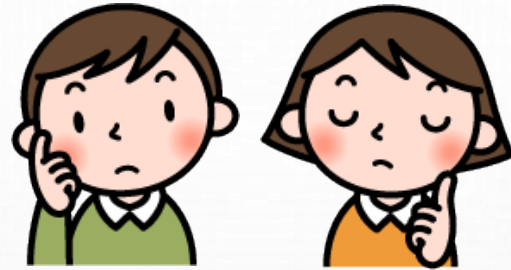


災害時の対応における課題を地域と共有できた。

【これまで】

地域の方から

障害のある子どもの
学校があることは
知ってるけど...



通学している姿を
見たことはあるけど...

地域の方と防災に関する体験を共有することで...

- ・ **子どもの障害の状況を具体的に知ってもらえた。**
- ・ **子どもの存在を身近に感じてもらえるようになった。**
- ・ **災害時には障害のある人が避難所に来る可能性があることを感じ取ってもらえた。**

4 取組の成果（CSの良さ）

2019年度全国CS研究大会
第4分科会

1 幼児児童生徒にとって

- ① 地域での学習活動を増やすことができ、学習の幅が広がった。
- ② 交流の場が増えることで、幼児児童生徒が外部の方から肯定的な評価を得ることができ、自己肯定感の醸成につながった。

2 教職員にとって

- ① これまでも地域との交流は行っていたが、CSとして取り組むことで、より準備等をスムーズに行えた。
- ② 地域との連携に対する教職員の意識が前向きになってきた。

3 地域にとって

- ① 学校と地域のつながり、窓口があることで、学校のことや幼児児童生徒のことをよく知ることができるようになった。
- ② 障害のことや障害への配慮について考える機会ができた。

・障害のある幼児児童生徒の「自立と社会参加」
・ともに認めあえる「共生社会の実現」に向けて

特別支援学校「だからこそ」コミュニティ・スクールの仕組みが必要！

ご静聴ありがとうございました。



本校裏にそびえる陶ヶ岳